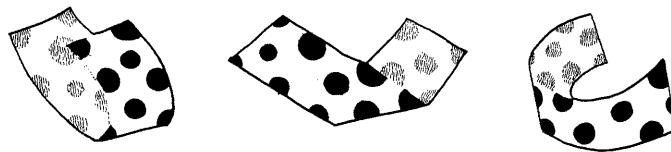


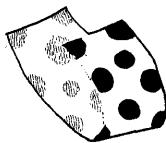
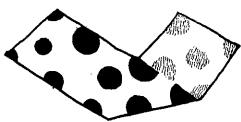
卷頭言

保育に“子どもの視点”を

森上 史朗

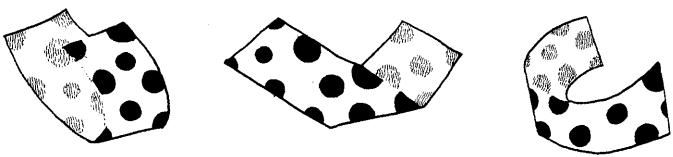


最近「保育の見直し」とか「新しい保育の創造」ということが強調されている。そのために、保育に関する法令や通知、制度などが改変されたり、あるいは国及び地方自治体から様々な新しい方針がうちだされたりしている。しかし、それらの多くはシステムや大人の都合が優先し、保育の質の確保や子どもの発達にとつての意味を問うという「子どもの視点」が欠落しているように思われる。そこで、最近の保育のさまざまな動向について、「保育の質」や「子どもの視点」から検討してみることにしたい。



第一には規制緩和の動向についてである。平成十年十二月に国の規制緩和委員会は中間報告をまとめ、保育園・幼稚園などの保育施設の設置主体について、民間企業や各種団体などの多様な事業者の参入を認め、それらの事業者間の対等な競争を通じて保育施設利用者の選択の幅を広げること及び市場原理の導入によつて、多様な保育ニーズに応えるサービスを安価に提供できるようすることなどを提言した。また、今の基準にはみたない駅型保育施設などの無認可保育施設をいわゆる“認証保育所”として認め、補助金を支給するとか、人件費の節減のために、非常勤や短時間保育士（パート）などを増やすことなどを提言している。規制緩和を推進することは確かに待機児の解消や経費削減に役立つという面はある。しかし、子どもの発達を促す経験の確保とか保育の質の確保ということからすると、そこには大きな問題がある。

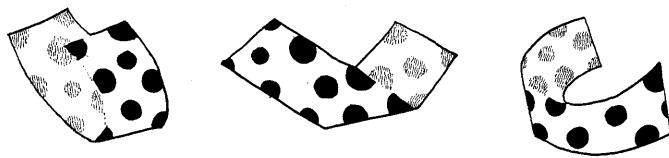
いうまでもなく、幼稚園や保育園は、単に保護者に代わって乳幼児を預かり、つづがなくその日を送ればよいというだけのところではない。そこは子どもの発達を促すための豊かな環境が用意されており、また、自分とは異なる他者との出会いがあり、相互に刺激し合い、育ち合う仲間関係なども存在している。さらに、そこには、一人一人の子どもの発達に応じて適切な援助ができる専門性を備えた保育者がいて、その役割を適切に果たしている。ところが現在、さまざまなかかわらず、規制緩和によつて認証された駅型保育施設などのなかに



は、室内の人工的、無機的環境での生活のみで、自然とのかかわりや、直接的体験をもつ機会は皆無に等しいものがある。また、企業参入によつて設置されたある保育施設では、全員が若い一年ごとの契約職員であり、保育室ではカセットコーダに合わせて紙芝居をめくつてゐるだけというような保育が行われてゐる。これでは想像の世界が豊かに育つていくことなど、到底期待できない。

専門性を備えた熟達した保育者の必要性について、津守真氏が『保育学研究』の最新号のなかで次のように述べてゐることばに耳を傾ける必要がある。すなわち、「保育園や幼稚園で、このごろ子どもの様子がおかしいと思い、先生がいつもその子をそばに付けて、おぶつたり抱いたりするうちに、その子の家族に家庭問題が生じていることを知ることは少なくない。保育者が、小さな行動から子どもの危機を察知してそれに応え、大きな問題となるのを未然に防いでいることは多い。そのよつな例は数え切れない。乳幼児を保育する人は瞬時も気を抜くことができないところに乳幼児の保育の特色がある」と。

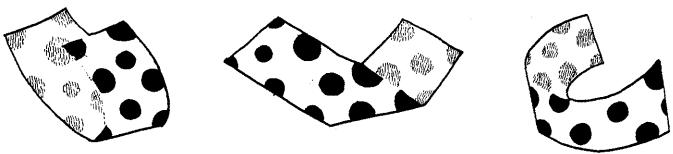
第二には最近の保育現場では、預かり保育、延長保育、早朝保育、休日保育、一時保育、子育て支援等、実に多様な保育ニーズに応えることが要求され、保育者にゆとりがなくなつてきてゐることである。そのため、保育サービスのメニューは多く用意されているのだが、その内容は実に乏しいものになつてゐることが多い。例えば「預



かり保育”や“延長保育”も、正規の保育ではないという不思議な発想のもとに、子どもたちを一室に集めてテレビを見せたり、いつも同じ玩具で遊ばせておくというような保育をよく目にすることがある。これとは反対に、この時間を作りに生かすということで、延長保育、預かり保育など、時間に全員一齊に英語や文字の指導、体操指導などに取り組ませているところもある。これなども乳幼児の発達に必要な経験や、生活のリズムと連続性などを考えたと、大きな問題があるといわなくてはならないであろう。

第三には最近の幼児数の減少や国の方分権化施策の進展などに伴って、全国各地で保育施設の統廃合が行われたり、幼の一体化施設などが設立されたりしていることである。

東北のある村に、最近その地域全体の保育施設を一ヵ所に統合した豪華な保育一体化施設が出来ている。子どもたちは村のあちこちから通園バスで送られてそこに集まつてくる。そのため、地域では昼間は子どもの姿を全く見かけることはないし、子どもの声も全く聞かれない。また、バスの送迎であるため、その日の子どもについての情報が親と保育者の間でかわされるということも全くない。これでは保育施設と家庭が手を携えて子どものすこやかな育ちを考えていこうという気運を妨げてしまう。今後の少子化の進展を考えたとき、安易に統廃合に向かうのではなく、これから保



育施設は小規模であつてもよい、地域の子育てセンターとして位置づき、「ここに園があつてよかつた」「この子どもたちを園と保護者と地域全体で見守り、育てていく」という気運をもり立てていく方向に向かうべきではないか。

また、幼保の一体化ということも制度論が優先するのではなく、「保育の質」の観点からの検討が必要であろう。たとえば、短時間児（幼稚園対象児）と長時間児（保育園対象児）を単に一緒にすればよいというものではなく、両者が同じ施設の中でも生活する中で、両者の生活リズムの違いに配慮した一日の生活のデザインが考慮されるか、また、短時間児と長時間児との結びつきを促す保育上の工夫がどのように行われていて、両者が心理的に分断されることがないかどうかなどの検討が必要とされているか、また、短時間児と長時間児との結びつきを促す保育上の工夫がどのように行われていて、両者が心理的に分断されることがないかどうかなどの検討が必要とされよう。さらに、児童とクラス担任との結びつきやクラスの枠を超えた他の保育者と児童との結びつき、あるいは保育者同士のチームワークの在り方などが問題となる。そうした「保育の質」や、「子どもの視点」から検討すると、制度的には全国的には高い評価を受けている一体化施設であつても、問題がある場合が多い。

なお、最近「新しい保育の創造」ということで「ティーム保育」とか「特色ある保育実践」ということが強調されているが、これなども、「子どもの視点」が欠落するとかえって、保育の形骸化をもたらすことになる。